



地方大学への招待状

私が都市部の研究機関から地方大学に赴任してかれこれ10年近くの月日が流れた。若者の減少に伴い国立大学の在り方が問われており、運営費交付金の減少が続く中、各地方大学は生き残りをかけて懸命な努力を続けている。私もその一員であるが、あまり明るいニュースを耳にしないというのが正直なところである。

そこで、今回は都市部と地方、両方の研究機関に勤めた経験をもとにして、私が地方大学に勤めて良かった点をいくつかご紹介させていただこうと思う。まず一つめは生活の面である。私は夫婦共働きで小学生の子どももいるが、家の周辺に頼れる親族もおらず、ここ数年は二人とも仕事と家事、育児などでてんでこ舞いの日々を送ってきた。都会では、保育園や学童保育などの空きがなく、これらの施設を利用するのは非常に困難だと報道されているが、少なくとも私が住んでいる地域では比較的スムーズに入所できた。家賃も安く、東京ではアパートに住むぐらいの家賃で一軒家が借りられるのも良い点である。地価が安いので、家を買うこともできなくはない。私の場合は職場の周辺に家を借りているので、車で10分ぐらいで職場に到着することができる。保育園や子供が通っている学童保育は職場と家の間にあるので、子供の送り迎えも楽にできる。通勤時間が短いので、余った時間をいわゆるライフタイムに回すことができるのだ。あと何と言っても空が広く、空気や水がおいしい。場所にもよるが地方では山、川、海など周囲は自然に満ちているので、研究で行き詰った際の気分転換もできるし、子供にとっても自然に囲まれた生活を送れるといういい面もあるかと思う。最近では研究者同士のカップルも多いと聞く。育児とキャリア形成を両立するという点では地方都市も悪くない選択かと思う。海外の大学では夫婦研究者を同時に雇用するDual Hire制度があり、

最近、九州大学も同様の制度を導入して話題となっている。地方大学も、このような制度を導入してもっと生活面の利点を打ち出していけば、優秀な研究者の獲得が可能となるかもしれない。

二つめは研究環境である。少なくとも私の周辺では、研究機器も充実しており、本人の能力とやる気さえあれば、いい研究ができる環境かと思われる。あと研究室の敷地が地方大学のほうが広い気がする（人が少ないだけかもしれないが、学生でもベンチがもらえる）。また、動物飼育に必要なコストが中央の大学の方がはるかに高いという噂を耳にしたことがある。例えばマウス室の使用代やマウスのケージ代一つにしてもずいぶん値段が違うらしい。加えて通勤時間が短いことは、研究に費やす時間や体力の確保にもつながる。このように研究者としてのワークライフバランスを保つためには、地方大学もなかなか良いのではないかと思われる。一方、いい点ばかりを挙げてみたが、先に述べたように難しい問題もある。それは若手研究者の減少と中央都市の大学への流出である。私の所属する大学も研究環境の改善や学生の増加に懸命に取り組んでいるのであるが、やはり有名大学へ行きたがる人が多いのが実情だ。あと地方にはあまり研究大学がないので、学振の特別奨励研究員のように必ず別の機関へと応募しなければならないケースでは必然的に研究機関の多い都心部に人が流出していくことも多く見受けられる。このような人材の中央の大学への過度の集中によって地方大学の研究力がますます低下することが懸念される。地方大学にも研究をする環境はかなり整っているので、このような研究者をポストクヤスタッフとして地方にうまく還流させるシステムがあれば、地方大学の研究力アップにも繋がるのではないかと思う。

先日、テレビでとある国の貧しい村に小学校を作ったら、10年後にはその小学校を中心に町ができて栄えていたという番組をやっていた。甘い考えかもしれないが、地方大学が地域貢献だけではなく研究力でもより活性化すれば、若い人が集まり、その地域も元気になって、最終的には地域創生の一端も担えるのではないかと期待している。

そこのあなた、一緒に地方で研究してみませんか？

(ロン)